

社乃社

秩父神社社報
社乃社(ははそのもり)

第 24 号

平成13年12月3日
(大 祭)



とつたの
大聖堂を
庭にて
遊び
音が神々の
とゆもす

「神樂の歐州公演に寄せて」

父の実の秩父のさと 母そ葉の柞のもりに 幾世経て鎮まる神が
はろばると海波越えて 外つ國の異なる神の大聖堂に今し見ゆる
思慮深く憂いを帶びた 眼差しを四方に巡らし 心して歩を進めつつ
御手に採る御麻を振るふ わが八意の思兼の神

天照らし坐す皇大神の 岩屋戸に隠れし世の 暗き世の騒ぎであるを
いかにせむ 明き世に戻さむものと 神々の遊びし祭り

思ほへば 今を去る五百年近き 経りし世に基督の 教へを宣ぶと
はろばると わが国に使ひし人等 古都ローマに本つ 拠と頼む
イエズス会の 建てし聖堂

そが聖イグナチオ教会の その祭壇の御前に 今しわが神々の
神籬を設けて 日の本の神遊びする その奇しけさよ。

反歌

外つ国の 大聖堂を庭にして 吾が神々の 遊びとよもす



解説 秩父神社(23)

彩の国名工會々長

坂本才一郎

◆秩父神社神門棟札

神社には巾8寸5分、長1尺9寸5分、厚1分の銅版製の立派な神門棟札を保管する。棟札には表面に工事関係者、裏面に寄進者32名の芳名と工事経過を詳細に記してある。

この神門は大正十年起工、十四年七月竣工である。多くの関係者も建造以来76年を経過するので不明になりつつある。神社でも内務省神社局技師角南隆を工事顧問にむかえ、伊勢神宮造営局技手岡田貞次郎に設計監督を依頼したことは、神門の造営に大きな期待をかけていたことが推察される。

角南技師は明治二十三年内務省技師となり、官幣社の御造営最高指導者として多くの工事に関係した。造営誌の刊行は僅かで其一端だけが知られるが、官幣

中社長田神社造営誌によると本殿の上棟祭は昭和三年で角南技師が検知のもとに実行なわれている。官幣大社多賀神社造営誌によると、本殿遷座祭は昭和十三年で内務省技師角南隆として列席している。

昭和二十八年、式年遷宮では角南技師は臨時造営局長であった。角南技師が関係した社殿は何れも尊厳優美で絵様と称する細部の文様も上品で民間の工匠は内務省式といつたが、かかる名建築を至る所に残した角南技師の功績は偉大であり、神社建築の大家であつた。

秩父神社の神門は、本柱は丸、脚柱は角の大面取で、表柱間九尺八寸、側面八尺四寸の四脚門である。左右に二間の透屏を付して丸柱際は唐戸の出入口とし、他は吹抜の蔀格子とし、透屏の屋根の箱棟から僅か上に丸柱上の冠木を長く出した外觀はすこぶるよい。

この門の彫刻の文様は桃山様式を基調としながらも、流麗な曲線は自由自在で今まで見られなかつた斬新な独創的意匠でみたされている。飾金具もまた目新しい意匠で木部とよく調和している。内務省式でもなく、当時の設計を見ると彫刻も飾金具も現状と同じ様な略図が書かれているので、設計者が意匠図も書いたと想像される。

東日本の岡田式文様になる建築は秩父神社門と歌舞伎座となり鬼岡田の名声は増々輝くであろう。西日本にも社寺建築の鬼才がいた。それは京都府技師の岡田信一郎という人が書いたという伝承は信じてもよい

秩父神社神門新築落成奉告祭執行 大正十四年七月三日

同 黒属	小川元吉	秩父町長	伊古田善三郎
同秩父部長	岡 松生	同 前杜寧	黒崎信吾
同事務官地方課長	林 信夫	同 社寧	新井彦忠
同書記官内務部長	今宿次雄	同 社寧	横田朝一
埼玉県知事	崎社秩父神社々司	同 菊田福太郎	大森喜右衛門
工事顧問	内務省神社局技師 角南隆	同 所工事請負 丸岡治助	氏子範代
工事設計並監督	建築委員 斎藤愛次郎	同 副機械操業課長 齋藤宗十郎	松本音助
神宮造営局技手	浅見錦吉	同 所工事請負 齋藤直吉五郎	井上久之助
岡田貞次郎	内田角之助	同 所工事請負 佐藤由良平太郎	松本仙三郎
青木捨吉	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	南源太郎
当所工事請負 丸岡治助	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	新井勝藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	祐原萬藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	井上久之助
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	松本仙三郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	南源太郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	新井勝藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	祐原萬藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	井上久之助
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	松本仙三郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	南源太郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	新井勝藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	祐原萬藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	井上久之助
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	松本仙三郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	南源太郎
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	新井勝藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	祐原萬藏
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	井上久之助
同 所工事請負 齋藤直吉五郎	同 所工事請負 鈴木義三郎	同 所工事請負 関根伊豆三郎	松本仙三郎

と思われる。岡田は明治三十九年東大卒、成績優秀で恩賜賞、明治四十四年早稲田大学講師、大正十二年美術学校教授、大阪府立中島公会堂競技設計に一等当選、大正十四年岡田の設計である東京歌舞伎座竣工。大正・昭和初期の代表的建築である。岡田の資料は国会図書館に保存してあるとのことで、図書館の調査で秩父神社門に關係した記事でもあればと期待している。おなじ岡田姓にしろ棟札に記す岡田貞次郎の設計では、神門ができるところである。

最後の作品は「やすらぎ踊り」で有名な今宮神社。本殿、拝殿とも亀岡技師の設計で各部の文様も桃山式だが、神社風な文様である。

岡田式も亀岡式も優劣はないが、どちらの人物も鬼才なので洗練された文様が書けたと思われる。私共凡人でできる技ではない。次回は棟札の人名と岡田の調査結果を解説しよう。

神社の神門が岡田信一郎と判明すれば、東日本の岡田式文様になる建築は秩父神社門と歌舞伎座となり鬼岡田の名声は増々輝くであろう。西日本にも社寺建築の鬼才がいた。それは京都府技師の岡田信一郎という人が書いたという伝承は信じてもよい

「秩父まほろば塾」設立に向けて

宮 司 蘭 田 稔

はじめに

去る八月十一日（土）の晩に第一回秩父まほろばシンポジウムを「どうする秩父」を主題に催してからすでに四ヶ月近く経過して、早くも当社の例大祭を迎えることになりました。当時はまだ夏の盛りで、会場に冷房を効かせての軽食を挟んだ三時間あまりの熱心な意見交換が実現したことは、主催者のひとりとして参会者の皆さんに厚く御礼申し上げます。また本会を共催していたいたい秩父ケーブルTVのご好意で、本会の基調講演から提言や討論の様子を細大もらさず録画された記録が毎週末の番組で放送されましたので、市内の視聴者に広くその内容をお伝えできることも幸いでした。本誌の前号（七月二十日発行）でも、また当日の趣旨説明でも申しましたように、この「どうする秩父」シンポの開催は、あくまで「秩父まほろば」運動の実践母体となるグループ造りの旗揚げであり、その呼掛けでありました。そこで今回は、この意見交換の内容を改めて振り返りながら、「秩父まほろば塾」なるワークショッピングの呼掛けをさせていただきたいと存じます。

一 魅力ある都市の条件 — 基調講演から —

当日はあいにく雨まじりの天候に各種の会合が重なつて出席者は百名を超える程度でしたが、それでも途中ほとんど退席することもなく熱心に最後まで本会に参加していただきました。そのことは、やはり秩父



二 「どうする秩父」四つの提言

この基調講演に続いて、四人の提言者が各テーマごとに現状分析を踏まえた提言をいたしました。

まず筆者が『どうする秩父のマチづくり』と題して、秩父ならではのマチおこしには①住民自身が発想する「内発的発展」こそ活性化の鍵であり、②その観点で秩父の祭礼と巡礼という風土文化こそマチおこしの核にすべきであるから、③その賑わいを平日の観光にも魅力とさせる「町ぐるみ回遊型の祭礼・巡礼博物館」の実現をめざしたい、というかねてから構想を提言しました。つぎに「秩父の環境を考える会」の石川

ケーブルTVが提起してきた「どうする秩父」の問い合わせに対応して地元の皆さんのがそれ何とかしなければという熱い想いを抱えているからこそ、と実感した次第です。

千葉大学で現代の都市工学、特に環境デザインを研究中で当初から我々実行委員会の仲間でもある秩父出身の田代順孝氏が、まず基調講演で要領よく「病める地方都市」秩父の自己診断や再生への処方箋を示してくれました。最初に田代氏が「花と緑の環境マネージメント」国際審査委員を務めた経験から、その際の国際都市コンクールの審査基準を紹介したところによると、①素晴らしい景観や環境を活かしているか。②文化・歴史遺産を十分活用しているか。③自然環境に配慮した施策を展開しているか。④住民参加方式で徹底しているか。⑤将来の計画に基づいた行政施策を開拓しているか。の五項目の基準があつて、要するに「魅力的で住みよいマチの条件」とは、人々が生き生きと生活し、すべてに活気のあることだとのこと。そこで今の秩父は、この基準に照らしてどこに課題があるかという観点からさまざまな現状の欠点の指摘がなされた後、それでも首都圏に近い立地条件にある秩父に残されている自然環境と歴史文化の魅力を活かす処方箋を10項目ほど具体的に提示してくれたのです。

友一會長が『どうする未来の武甲山』のテーマで、開発の進む武甲山とその周辺の現状を各種の調査結果に基づいて報告された。それでも武甲山が秩父ならず埼玉の県民すべての心のふるさとのシンボルであるところから、今から未来に向けて我々に課せられた仕事は、①ミティゲーションの課題、つまり武甲山への環境負荷を何とか回避したり最小化したり代償したりする工夫や努力の方向と、②シンボリゼーションの課題、つまり心のふるさとのシンボルとして武甲山を再生せしめる方策とその実践ではあるまいか、との提言でした。

三番目には地元の先進的な女性企業家で各方面にも活躍されている島崎洋子氏が『どうする秩父の企業おこし』について提言され、まず秩父織物など過去の地場産業にみる先人の創意に満ちた工夫と努力の歴史を振り返りながら、現在でも秩父には衣食住すべての企業家に国際的にも通じた高い知識と技術の持ち主がいるのだから、今の質の高い生活文化が求められている時代に応じて地元の企業、行政、住民一体の相互協力を推し進め、結束して「秩父ブランド」商品を創りだすほどの元気と勇気を期待したいという趣旨の提言をされました。

最後に、秩父屋台囃子保存会の高橋利雄会長が『どうする秩父の人づくり』と題して特に次代の秩父を背負うべき青少年の育成を論じられ、彼らがやがて秩父活性化の原動力となるには何よりも郷土人にふさわしいルール、マナー、モラルを身につけつつ感性豊かな精神を「高揚させる何か」の持ち主に育てることが大切だと前の前提を示され、その観点から社会教育の一環として地域性を活かした伝統行事などへの参加をうながし、伝統文化の継承を通じて正しい言葉遣いや生活態度などの社会性を身につけさせることが肝要であり、そのためにも秩父の伝統芸能である歌舞伎、神楽、獅子舞、屋台囃子などを網羅して伝承する施設として「芸能文化会館」の設立をめざしたい、との提言がなされました。



結び 「秩父まほろば塾」 参加のお願い

以上の基調講演と四つの提言がなされた後、正月を迎えた後、改めて「秩父まほろば塾」を結成し、シンポジウムで皆野町出身の建築家、根岸俊雄氏が挑戦的司会役をつとめて参加者全員の自由で活発な意見交換がなされました。残念ながら紙幅に限りがありますので、その有益な提案は今後のワークショップで改めて検討の材料にさせていただきます。

いずれにせよ、こうしてひとまず「秩父まほろば」運動の提起を済ませましたので、いささか時日を過ごしましたが、今年の例大祭と来年の正月を迎えた後、改めて「秩父まほろば塾」を結成し、シンポジウムで提言した四つのテーマごとにグループ編成をしてワークショップ（実践的研究会）への参加を呼びかけたいと存じます。どうか、各テーマに強い関心と実践への意欲をお持ちの皆さん、自弁で結集されることを切に祈る次第です。

【表紙解説】

とつ国の 大聖堂と庭にして
吾が神々の 遊びとよもす

表紙の歌は2頁にも掲載されていますが、この度の神楽公演に当社薗田宮司の歌であります。また、表紙は、秩父神社神楽欧州公演の開催地の一つであるイタリアはローマのイエズス会聖イグナチオ教会の大聖堂にお

いて行なわれた公演前の修祓式のものようを掲載しました。日本の文化と欧洲の文化、特に宗教・習慣においては、まったく異なるものはあります。この度の西洋の教会における日本本の伝統文化である神樂の奉納は、違和感を感じるどころか、双方が永い歴史から培った真の「極められたもの」であるからこそ、「時間」・「空間」を超えて実現した大変素晴らしい芸術的融合であると感動しました。

秩父神樂ヨーロッパ公演 に参加して

権 権 宜 守 屋 通 夫



去る八月三十日より九月八日までの十日間、日本文化の根源である「神道」を広くヨーロッパに紹介するため、「神樂」を奉納するという企画趣旨に基づき実施された今回の公演は福岡県豊前市幡吹八幡神社の「豊前神樂」と共に「秩父神樂」を奉納して参りました。私は諸事務を担当し、そして神楽師としても参加させて頂き生涯忘れる事のできない貴重な経験を積んで参りました。

まず、最初の訪問国ノルウェーのオスロでは、エドワード・ムンクの作品「叫び」で知られている、ムンク美術館に於いて奉納致しました。この地で三年に一度開催されている欧州諸国との韓研究学術會議に合わせて行なわれた神楽公演は、学会参加者はばかりでなく一般の人々にも呼びかけて頂いており、神楽を通じての交流は、言葉はなくとも会場全体で感じることができ、最初の地から大きな成果に、ようり一層の励みとなりました。

二番目の訪問国イギリスのロンドンでは、大英博物館に於いて、日英関係四百年記念として「神道美術展覧会」が開催されておりました。その時期に神楽公演を披露できた事は、とても有意義な機会だつたと思います。公演場所となつたロンドン大学SOAS講堂が神楽の音色と舞に包まれると、

今回ヨーロッパ公演に同行した、國學院大学日本文化研究所茂木栄助教授(右)鶴岡文庫加藤健司研究員(左)



教会で、日本古来の伝統芸能である「神樂」を奉納するということは、古くから人々に受け継がれてきた「和」と「洋」の異なる歴史が重なり調和したかのような時間の流れを創り出し、それは「神」と「人」の心を魅了させた公演となりました。

今回この公演でのたくさんの出来事は、神楽師自身の伝承責任をも再確認させられた貴重な数々でした。

神楽と共に歩める現在の環境に「喜び」と大神様に「感謝」し、この経験を生かし実践に努める所存

その最後にこの場をお借りして、お世話になつた皆様、ヨーロッパ各地で公演で同行して下さつた方々に、心よりお礼申し上げます。

その瞬間神楽殿に於いて奉納しているような錯覚を起こす程感動的なもので、芸能には国境はない痛感致しました。

三番目の訪問国イタリアのローマでは、聖イグナチオ教会にて奉納致しました。今までの公演場所と違い、ヨーロッパの人々に長い間信仰されているキリスト教の歴史あるたたずまいを感じられる

教会で、日本古来の伝統芸能である「神樂」を奉納するということは、古くから人々に受け継がれてきた「和」と「洋」の異なる歴史が重なり調和したかのような時間の流れを創り出し、それは「神」と「人」の心を魅了させた公演となりました。

今回この公演でのたくさんの出来事は、神楽師自身の伝承責任をも再確認させられた貴重な数々でした。

ヨーロッパ各地で公演で同行して下さつた方々に、心よりお礼申し上げます。

八月四日・五日と京都で開催された全国氏子青年協議会第39回定期大会「京都大会」に参加しました。

今井祥介会長他十八名は三日夜大型バスにて秩父を出発、翌朝八時半の開門と同時に大原三千院を見学、その後世界文化遺産のある賀茂御祖神社(下鴨神社)、銀閣寺、清水寺等を見学しました。式典会場の都ホテル到着後すぐ「熱血先生」「泣き虫先生」で有名な伏見工業高校ラグビー部総監督山口良治先生の記念講演が始まりました。

記念講演終了後、我々は梶の半纏を纏いレセプション会場へ向かいました。会場は既に全国各地より約二千名を越える氏青の方が集まっており、ここで我が秩父神社の蘭田宮司さんと合流しました。先づ最初に生間流式包丁、続いて舞妓さんによる祝舞、歓迎の辞と続き懇親会に入りました。全日程終了後も河原町の方へ出向、心に残る雅のおもてなしを受けました。

翌日一行は、吉田神社で正式参拝後、国宝の大元宮拝観、職員の方に丁寧な説明を受けました。その後貴布津總本宮神社で正式参拝を済ませ、貴船神社宮司様より紹介の川床料理を満喫しました。

途中事故渋滞にも遭いましたが、六日前二時ごろ無事秩父に帰着、一泊四日というハードスケジュールではありましたでしたが個人ではなかなか味わうことの出来ない貴重な経験をし、内容の濃い全国大会兼研修旅行でした。

また、この様な機会がありましたら是非参加させていただき、全国の氏子の方と交流を深め、見聞を広げたいと思います。

「京都大会」に参加して

事業部長伊古田俊



ふくろう

梟だより



◆ 第三回 お宮と親子の集いのこと

本年で第三回を迎える「お宮と親子の集い」が、秩父神社斎館・平成殿を会場に8月9日に行なわれました。

秩父地域では、毎年夏におよそ四十数年前から続く巡回子供会が開催されてまいりましたが、少子化などの影響により参加者が減少した地区もみられることから、秩父神社を会場に一日かぎりの開催となりました。

日程は、手水作法指導の後、御社殿においての昇殿参拝からはじまり、親子でうたうコーナーや絵馬づくり・水鉄砲づくり、またむさしの児童文化研究会の先生方による腹話術・手品・皿まわし・南京たますだれなどが披露され、おとうさん、おかあさん、お子さんたちと秩父郡市の神主さんとの交流が拡がり、大変充実した一日をお宮で過ごしました。

この度、新たに立正佼成会秩父教会新道場が竣工し、そのお祝いの式典「入仏・落慶式典」が9月30日に行なわれました。その前日の29日、立正佼成会長庭野日鑑さまが式典に出席されたため秩父にお越しになり、秩父の総社である当社にお詣りをいたしました。

また、10月21日には秩父教会の御会式が境内で行なわれ、その翌日には秩父教会会長の米多氏をはじめ会員の方々が

ていただきました。これからも、回を重ねてまいりますので、多くのご参加をお待ちしております。

◆ 立正佼成会長正式参拝のこと



◆ 埼玉県立博物館特別展「神楽の風景」のこと

去る10月13日～11月25日の期間、埼玉県立博物館において特別展「埼玉の名宝シリーズ3―神楽の風景」が開催されました。

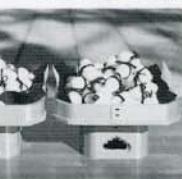
この秋、開館30周年という節目を迎える埼玉県立博物館が、県内に伝わる神楽に関する衣装や面を一堂に展示し、郷土埼玉の誇る文化を広く大勢の方々に紹介するための催しとなりました。

当社からは、神楽衣装をはじめ天鈿女命・八意思兼神・天児屋根命など計19の面が出品展示されました。



秩父神社の御日供祭に参列され、9月に起きたアメリカ同時多発テロに対し世界人類の平和を願つて大神さまの大前に祈りを捧げられ、別室で蘭田宮司の講話を聞いていただきました。

「まゆ」は古来より財を生む絹を産するものとされ、福を招くものと大切にされておりました。此の度その蘭を、当社に参拝される方々に、「福蘭守り」・「福蘭みくじ」として新たに整え授与いたします。



◆ 秩父神社妙見講

自 平成十三年 九月
至 平成十三年十一月

九月	七日	川口三栄講
		金子秀行講元外四百三十四名
九月	九日	小鹿野講
		小菅健夫講元外百六十三名

九月十五日	中村講
	高橋信一郎講元外二百五十八名

九月十六日	上町講
	新井文久造講元外九十二名

十月	中淳一講元外二百五十八名
	今井奎吾講元外百七十四名

十月十三日	上宮地講
	新井文久造講元外九十二名

十月十九日	東町講
	出浦義雄講元外百三十八名

十一月十一日	番場講
	持田恭三講元外百十六名

妙見祭りの夜空を彩る 百花繚乱花火の競演



市内上野町 豊田 弘典撮影

秋父夜祭りでは、絢爛豪華な二基の笠鉾と四基の屋台が町内を巡行し、同時に迫力ある秩父屋台囃子の音色が響き渡ります。そしてクラスマックスである団子坂の曳き上げでは、百花繚乱の花火が御神幸行列を出迎え、いよいよ武甲山の神様と妙見さまの逢瀬のときを迎えます。秩父の妙見さまは、もともと花園妙見の流れと伝わり、「はな」にまつわることから、「はな」は実を結ぶ前触れを意味し予祝の象徴でもありました。

秋父夜祭りの夜空を彩る美しい「花火」は、秩父公園で、第一回の打上花火大会が大正元年(1912)から行なわれ、途中昭和17年(1942)には太平洋戦争で中断、昭和22年(1947)において事故発生のため翌年から打上場を羊山公園に踏切において実施されています。現在に至つて本年で第49回を迎える煙火競技大会であります。

秋父郡市内の花火師さんは、諸般の事情から永い歴史を有していなかった仕掛け花火を打切り、花火ターマインなどの打上花火へと全面移行しました。秩父市内のお楽しみによる夜空の競演を中心にお楽しみください。

秩父夜祭りでは、絢爛豪華な二基の笠鉾と四基の屋台が町内を巡行し、同時に迫力ある秩父屋台囃子の音色が響き渡ります。そしてクラスマックスである団子坂の曳き上げでは、百花繚乱の花火が御神幸行列を出迎え、いよいよ武甲山の神様と妙見さまの逢瀬のときを迎えます。秩父の妙見さまは、もともと花園妙見の流れと伝わり、「はな」にまつわることから、「はな」は実を結ぶ前触れを意味し予祝の象徴でもありました。

◆御神馬のお話

平成14年は壬午(みずのえうま)年です。

秩父夜祭りには、二頭の御神馬が奉納され御神幸行列と共に旅所まで進みます。この御神馬に関して古くから興味深い古いが伝わっています。御神馬に選ばれた馬二頭の毛並みによって翌年の天候を占い、作付けの計画をたてるというのです。

例えば、白毛の馬は晴天の日が多く、また黒毛の馬は雨が多いことをあらわし、そして、栗毛の馬は晴れ曇りが多いと言われています。

御神馬二頭の組合せが白毛・栗毛であれば一年の天候は順調となり、黒毛・栗毛の組合せの時は雨が多いなどと伝わっています。これにより農家では来年の作付けの計画を立て、比企、大里、児玉、群馬などから多くの農業関係者が夜祭りに訪れてきました。

御神馬と天候の関係について、更にも不思議な話を御神馬の世人である秩父市上町の逸見氏にうかがいました。

例年三日の朝、御神馬が宮参りを済ませて下境内の厩に入りますが、その厩に入る位置が向かってお宮に近い側には白色の馬、その片

方には黒毛もしくは黒毛色の馬を入れることになっていました。

平成10年、例年通りに御神馬を厩に入れたところが、一般的の参拝者に「これは位置が反対じゃないか」と忠告されたそうです。既に大勢の人で境内が賑わっていたため、馬を刺激してはいけないとそのままのままの位置にしました。

天候と御神馬(牛)には、何か神秘的かつ不思議な関係を感じずにはいられません。

編集後記

■新世紀はじめての夜祭りを迎えることに社報「柞乃杜」第24号をお届け致します。

■平成13年9月11日アメリカ・ニューヨークにおける同時多発テロ事件やその後のたんそ菌事件など、多くの尊い命が奪われ世界中を震撼させました。

また、わが国においても長びく景気の低迷や進展のない雇用問題などの社会状況から、多くの人々が暗く落ち込んでいます。このような出来事を望んでいることと思います。

■この暗い世相を吹きはらい、私たち国民が、喜び、待ち望んでいたことが、もうすぐその時を迎えようとしております。

皇太子さま雅子さまのお子さまのご誕生です。報道などで、出産予定日は当社の大祭期間のころに重なるかもしれません

ること。元気なお子さまが生まれになることを心よりお祈り申し上げます。

大切な新築の家が安全であるように、また正月を迎えて新年の室内安全を祈るには、ぜひ神棚を設けて神々のご加護を願うことが必要です。

伊勢神宮と氏神さまと歳神さまの三体セットのご神札を神棚に納め、毎朝心をこめてお祈りしましよう。なお住宅の建て方によつて神棚を設けにくいご家庭には、写真のように小型で壁柱にも掛けられる神棚を用意しております。お問い合わせ下さい。



※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100%の再生紙を使用しています。

平成十三年(2001)十二月三日
編集発行 秩父神社社務所
〒368-0341 埼玉県秩父市番場町一-13
TEL (049) 221-0262
FAX (049) 221-5596
印刷所 有限会社 拡文社印刷所
〒368-0343 秩父市東町二七一八